敗戦直後の書籍事情

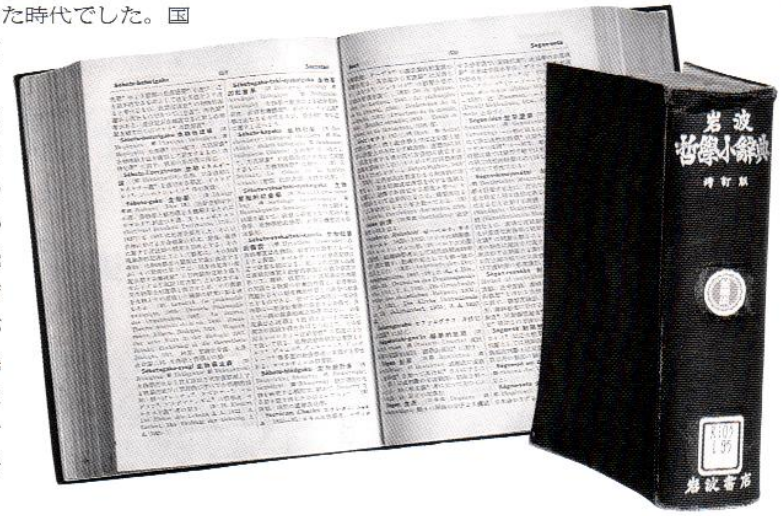
山内孝郎

本誌の創刊号に吉田明先生が『辭苑』についての思い出を書いておられましたが、私にもこの辞典については思い出があります。中学１年の時に国語の先生から『辭苑』か『廣辭林』を買うように言われました。私は、この辞書などを家に残したまま海軍の学校に行ってしまい、戦争が終って帰ってきてみたら空襲ですべて丸焼け、疎開にだした荷物も秋葉原の駅で焼けてしまい、文字通り着の身着のまま家族の命が助かったのがせめてもという状態でした。地面を掘って内側にブリキを張った物入れの濠も、逃げる時、父と弟が上に掛けた土の量が不十分だったらしく、露出した杭から火が入り、目ぼしいものは殆ど焼けてしまったそうです。その中で下の方にあったせいか辛うじて助かったのが、数冊の本でした。そのなかに『辭苑』、上田萬年の『大字典』、研究社の岡倉大英和、吉信大和英などが入っており、挫けた私の心をいくらか勇気づけてくれました。この『辭苑』は親戚の高校生などを回り行方不明になってしまいましたが、『大字典』は今でも持っています。

それから大学受験ということになりましたが、本というものがまったくありません。神田神保町の焼け残った古本屋街に行っても、物々交換で然るべき書物に金銭をつけなければ本が手に入らないわけです。交換に出すべき書物を持たないものは全くお手上げです。やむを得ず闇で手に入れた米を持っていって本屋の親父を籠絡したこともあります。自分が食べるはずの貴重な米を本に代える。このように本が不足していた時代でした。国が敗れて経済が完全に崩壊していた時代でした。

今地球上にこれと同様の、あるいはそれ以上の窮乏に陥っている国や地域があることを思わないわけにはいきません。しかし若者たちは貪るように本に飛びつき、たとえば特に岩波書店の新刊書発売日には長い行列が書店をとり囲みました。西田幾太郎や三木清の著書の発行日には特にそれが著しかったのですが、『岩波哲学小辞典』の時は行列に二晩くらい泊まり込みが出たほどで、私も行列に加わりました。ちょうど発売の直後でしたか大型の台風（カスリン台風）に見舞われ、利根川が栗橋のところで決壊し、東京の低地帯は一面の水浸しになり、総武線も不通になって、当時小岩に住んでいた私は、眼下に濁流うず巻く荒川の大鉄橋を、枕木を一つ一つ踏みしめながら渡り、激流が胸まであるところでは衣服を頭上にくくりつけて前後の人と互いに確保しながら渡るなどして、やっと家までたどり着いたことは忘れられません。

この辞典は戦前発行されたものの再版で、再版後もプレミアムがついたほど手に入りにくいものでした。哲学科に入っていた私は、この辞典を頼りにカントの原書などを読みましたが、間もなく欧米からの原書輸入が解禁され戦前からの定評ある辞典を見ることができるようになりました。

竹山道雄氏が嘆いた哲学流行の時代だったわけです。２年後1949年の中華人民共和国成立の時期を迎え、学生たちの多くは私も含めて左へと流れていきましたが、50年近く経った今日の状況を当時誰が予想したでしょう。しかし辞典にしても内容の確かなものは後までも残り、その基礎の上に改訂が重ねられていくものだと思います。学生諸君も私も激動する時代の中で変わるものと変わらないものを見分ける目を養っていきたいものだと思います。

（女子短期大学部教授）